1. 大井戸茶碗（おおいどちゃわん）　銘「山伏（やまぶし）」　朝鮮時代　16世紀　10.3×16.1cm
2. 自刻像（じこくぞう）　木喰明満（もくじきみょうまん）　江戸時代　1801年　75.5×27.0cm
3. 色紙和讃（しきしわさん）　紙本墨摺　室町時代　1553年　18.5×13.0cm
4. 仏教美学四部作（ぶっきょうびがくよんぶさく）　柳宗悦著　私家本
5. 白掛鉄絵蓋物（しろがけてつえふたもの）　磁州窯　明時代　16世紀　26.0×27.0cm
6. 洞庭秋月図（どうていしゅうげつず）（部分）　紙本墨画　朝鮮時代　19世紀

記念講演会　美の法門について　〔講師〕岡村美穂子（鈴木大拙館名誉館長）
3月12日(土)　18:00–19:30　〔料金〕300円（別途入館料が必要）〔定員〕100名（要予約）

□開館時間　10:00－17:00（入館は16:30まで）　□休館日　月曜（ただし祝日の場合は開館し、翌日振替休館）　□入館料　一般 1,100円　大高生 600円　中小生 200円　□所在地　〒153-0041　東京都目黒区駒場4-3-33□電話 03-3467-4527　□交通　京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分
□西館公開日　会期中の第2・第3水曜日、第2・第3土曜日（入館は 16:00 まで）

http://www.mingeikan.or.jp/　**日本民藝館**

美の法門

――柳宗悦の美思想

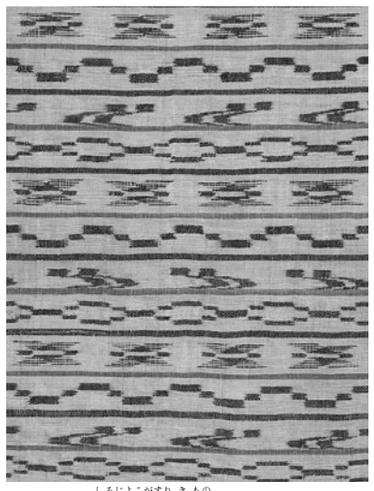
二〇一六年一月九日(土)――三月二十一日(月・祝)

〔写真〕大津絵　阿弥陀如来　紙本着色　江戸時代　17世紀　縦32・0cm

日本民藝館

柳宗悦　日本民藝館にて　1954年

无有好醜（むうこうじゅ）　柳宗悦　1950年代
35.5×35.8㎝



白地縞絣着物（しろじよこがすりきもの）（部分）
桐板・木綿　八重山
琉球王朝時代　19世紀

1948年（昭和23）、富山県の越中城端別院（じょうはなべついん）で一夏を送った当館創設者・柳宗悦（やなぎむねよし）（1889-1961）は、繙（ひもと）いていた「大無量寿経（だいむりょうじゅきょう）」第四願からはたと想い当たるところを得、一日にして「美の法門」を認（したた）めます。この時の体験を「何か啓示的感激を受けて、急に美思想の扉が開かれた感じであった」（「四十年の回想」1959年）と述懐しました。同年には日本民藝協会第二回全国協議会（京都相国寺）において、この考えを初めて公開。翌年3月には私家本として上梓します。柳の根本思想をしめす『美の法門』の誕生でした。

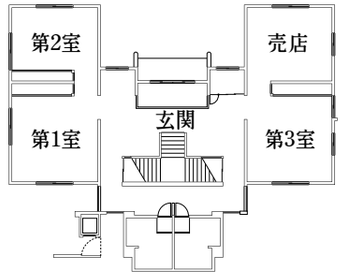
第四願とは法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）四十八願の中の一つで「無有好醜（むうこうじゅ）の願（がん）」とも呼ばれています。願には「たとい我れ仏を得たらんに、国の中の人天（にんでん）、形色（ぎょうしき）同じからずして、好（こう）と醜（じゅ）とあらば、正覚（しょうがく）を取らじ」と書かれています。柳は願文の人天を器物に当てはめ、好醜を美醜と受け取りました。そして法蔵菩薩がすでに正覚を取り、阿弥陀如来になっている事実は、本来の性（さが）においては美と醜がないことを証明していると確信し、それを基に「仏教美学」を構築していきました。こうして柳は名もなき人々が生む器がなぜ無上の美と結ばれているのかという、長年持ち続けた命題が氷解するのを感じたのです。

もともと宗教哲学者として世に出た柳は、『白樺』同人として多くの論文を寄稿し、キリスト教に関する著作も刊行していました。学習院高等科での恩師・鈴木大拙から受けた仏教に関わる薫陶も、柳の思想を考えるうえで忘れてはならないでしょう。そして美の問題に深く携わるようになった後も、宗教への思索は決して休むことがありませんでした。いや、柳にとって美への探究と宗教への思索は別事ではなかったのです。美しい器が生まれる現実と宗教的真理とに深い結縁を見続けたのでした。

『美の法門』以後、柳は仏教に関係する著作の刊行を精力的に進めます。1950年（昭和25）に『妙好人因幡の源左』。1955年（昭和30）に『南無阿弥陀佛』。1957年（昭和32）以降に発表した『無有好醜の願』『美の浄土』『法と美』は『美の法門』とあわせ「仏教美学四部作」と呼ばれています。1959年（昭和34）には『心偈』を上梓。1960年（昭和35）から出版が始まった『柳宗悦・宗教選集』は、キリスト教への論考を含む宗教論の集大成でした。

当館は、仏教関係の絵画・仏具・和讃などを多数所蔵しています。それまで仏教美術といわれてきた品も、柳は仏に奉仕する工芸品と位置付け蒐集を続けました。本展ではこれら仏教と縁（ゆかり）のある品と、『美の浄土』や『法と美』などで具体的に示した工芸品などを軸に構成し、くわえて柳の書や著作・原稿なども展観して、柳がたどり着いた東洋の美思想を紹介します。柳は日本民藝館の所蔵品を「美の標準」と名付け一般への公開を続けました。そこに提示された作物は、『美の法門』で解明した弥陀の本願の実証品でもあるのです。

展示室1階



〔玄関〕美の法門 −柳宗悦の美思想

〔第1室〕日本の陶磁器

日本民藝館には、瀬戸、丹波、伊万里など、東北から九州・沖縄にかけて、約3800点の日本陶磁を収蔵しています。それらのほとんどが民間需要のための民窯で作られたものです。本室では、当館蔵の江戸期から昭和初期までの日本陶磁を紹介します。

〔第2室〕西洋の民芸

展示期間：2月6日〜3月21日（2月5日まで閉室）

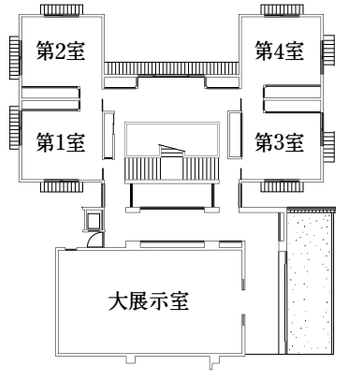
大正〜昭和初期、評価されることなく民間に埋もれていた「民芸（民衆的工芸品）」への眼差しは、ヨーロッパなどの海外にも向けられました。泥状の化粧土（スリップ）で装飾したイギリスのスリップウェアは、その代表的なものでしょう。館蔵する西洋の「民芸」を紹介します。

〔第3室〕日本の染織

藍や山桃などの植物染料で堅牢に染めた糸で織った縞・格子・絣などの着物をはじめ、屑糸や使い古した布を裂いて織った裂織、麻布に木綿糸で布目を数えて模様を刺した「こぎん」、筒描衣裳など、日本各地の暮らしに根ざした堅実な仕事の数々を紹介します。

〔1階第1室〕鼠志野柳文鉢（ねずみしのやなぎもんはち）
美濃　江戸時代　17世紀　径28.5㎝

展示室2階



〔第1室〕朝鮮時代の諸工芸

柳は朝鮮時代（1392−1910）の日常の器物に、もっとも豊かに民族固有の美が宿っていることを発見しました。この展示室では、朝鮮時代に作られた陶磁器、木工品、金工品、石工品や民画などの優品を展示し、人々の暮らしを彩った朝鮮の工芸美を紹介します。

〔第2室〕河井寛次郎作品

来年没後50年を迎える河井寛次郎（1890-1966）。当館所蔵の河井作品は柳宗悦によって選ばれました。茶碗や皿など、実用的で簡素な形状が中心の作品は、河井が得意としたいっちん文様や練込、点打、象嵌などの多彩な技法と鮮やかな釉薬によって彩られています。

〔第4室〕秀衡椀と漆絵

朱漆による絵文様と金箔による菱文が特徴の秀衡椀。発祥と生産地の確説は得ていませんが、この名称は奥州の藤原秀衡（？−1187）が作らせたという伝承に基くものです。格調高い加飾が施された秀衡椀のほか、朱漆を主とした数色の色漆の文様「漆絵」が施された漆器を特集します。

〔大展示室、第3室〕 美の法門 −柳宗悦の美思想

※出品協力・岩立フォーク テキスタイル ミュージアム

〔2階第2室〕辰砂筒描花文盒子（しんしゃつつがきはなもんごうす）
河井寛次郎　1950年　高7.8ｃｍ